［演題 11］ 地域生活支援におけるリアルオキュペーション

小原 亜紀
特定非営利活動法人いねいぶる

1. はじめに

病院や施設環境での暮らしでは、食事提供や嗜好品管理の下に支援がためされることからさほどの課題にはならないものの、地域社会の中で暮らしているからこその大きな課題となりやすいことの１つに金銭管理の支援がある。

本来の暮らしとは、仕事や学業などの役割活動を除いて、無計画性が高く、気分などによって活動が左右されやすいものである。そういった地域社会の環境で、当事者の主体性を前提としつつ自己責任で終わらせずに最低限の自己管理ができることをリアルオキュペーションの視点から支援した事例の経過について若干の考察を加えて説明する。

2. 事例紹介

A 氏、男性、40 歳代前半、統合失調症・軽度知的障害。

家族と同居しており、昨年７月に地域活動支援センター（以下，当施設）の利用を開始。家族との折り合いの関係で 10 月より入院後、12 月に退院。以降，地域で生活し、当施設に毎日通所。

金銭管理については、長女が A 氏の年金を管理している。長女に 2～3 日置きに 3000 円要求し、手元に金銭があるとすぐに全て使い果たしてしまい、その後に「自分の好きなものが買えない」ことで、執拗に金銭を要求し続けたり、壁や膝を叩くなどの常同行為を繰り返していた。金銭の使用用途は主にタバコ・飲料物・交通費。

母は躁鬱病、長女・次女ともに脳性麻痺であり、義理の弟のみ就労している。生活維持や経済面では長女にかかる負担が大きい。

筆者は、家族調整や、福祉制度・病院との仲介、当施設での A 氏の過ごし方の支援を行う。

3. ベースラインの評価

AMPS（Assessment of Motor and Process Skills）にて評価を行う。

結果は、運動技能は 0.73logits、処理技能は 0.48logits であった。技能項目ごとを関連づけてみてみると、以下の様な特徴を得た。図 1 参照。

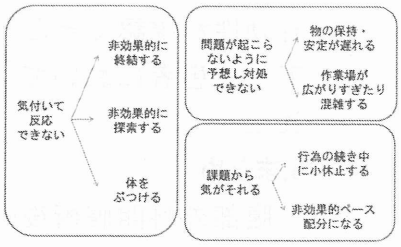

図 1 AMPS 評価技能項目の関連特徴

4. 介入方針の検討

退院前カンファレンスにて、金銭の強い要求に家族は困っていると聴取した。A 氏自身タバコを減らし、貯金をしたいという要望があった。そこで今回、目標となる作業遂行を「お小遣いの自己管理」とし、AMPS の技能項目に準じた評価を行った。特定基準は、a)長女から嗜好品代の 1 日 1000 円を預かり、b)そのお金で必要な物品を買い、c)収支を小遣い帳に記入し、d)残金を貯金箱に入れる。特定基準の選択肢は、i)嗜好品はタバコ・昼食代などを含み 1 日 1000 円。以上の作業は当施設にて行う。

5. 経過

小遣いの使用方法、金銭要求、小遣い帳の記入について焦点を当てて経過を追った。表１参照。

表１　経過説明

焦点	ベースライン	第１期（２ヶ月）	第２期（３ヶ月）	第３期（５ヶ月）
小遣い使用法	目標の金額内でやりくりすることに留意できない.	平日は1日1000円で収まり，留意できるが，休日は不足する. お茶・パン代の必要な金額をその都度もらい，購入する.	平日休日ともに１日 1000 円で収まり，留意できる. お茶・パン代を１週間分まとめて 2000 円もらい，やりくりすることに留意できる.	お茶・パン代を１週間分まとめて 1000 円もらい，やりくりすることに留意できる.
金銭要求	家族や筆者に要求を繰り返し，問題が起こらないように予想して自分の行動を修正できない，適切な時に援助を求められない.	家族に不足分を要求し，問題が起こらないように予想して自分の行動を修正できない，適切な時に援助を求められない.	家族に要求することがなくなり，筆者に伝え，問題が起こらないように予想して自分の行動を修正し，適切な時に援助を求められる.	年金の残金を気にし，家族や筆者に尋ねることで，問題が起こらないように予想して自分の行動を修正し，適切な時に援助を求められる.
小遣い帳記入	記入時，情報を繰り返し筆者にきき，間違いに気づいて反応することができない.	筆者不在で可能になり，自分で間違えに気づいて反応し，修正できるようになったため，介入終了.	自ら小遣い帳を振り返るようになった.	

6. 再評価

AMPS にて遂行技能の再評価を行った。

２回目の運動技能は 0.78logits、処理技能は 0.44logits だった。統計上、自立度の変化はなかった。しかし、臨床上の技能項目の特徴と下がった部分があった。技能項目間の関連性でみてみると、以下のな変化があった。図２参照。

そして、今回の目標となる作業遂行のお小遣いの自己管理は定着し、安定した状態でできるようになった。

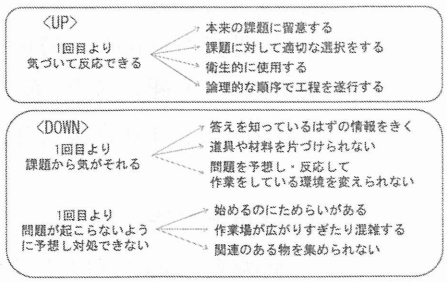

図２　AMPS 再評価技能項目の関連特徴

7. 考察

A 氏は不安があるとイライラし、欲求が満たされると収まるため、A 氏が不安に思う基準を下げることができないという悪循環に陥っていた。欲求が向けられていた家族は困り果て、欲求を満たさざるを得ない状態だった。今回筆者が、AMPS 評価をすることで、A 氏の技能特性が明らかになった。その特性を考慮した上で金銭管理に介入することにより、A 氏が納得する形で少しずつ目標の小遣いの中でやりくりするようになっていった。

また、小遣い帳をつけることでお金の使い方を振り返られるようになった。これは金銭管理という作業を筆者がすべて決めて行わせるのではなく、A 氏が主導権をもちながらお小遣いの自己管理という方法も学習し習得することができたためだと考える。

「自分の小遣いと相談できる力」と「好きなようにほしいものを買える力」とは、経済的側面において主体性を発揮できる力と、精神的側面において主体性を発揮できる力が両立するということではないだろうか。A 氏は「好きなようにほしいものを買える力」はあった。今回筆者を人的自助具とすることで「自分の小遣いと相談できる力」に支援できたと考える。この２つの力の両立が地域社会で暮らす上での自立といえるのではないだろうか。